

インクルージョン・インタナショナル世界会議参加記

著者	加藤 春樹
雑誌名	人間福祉研究
巻	2
ページ	125-135
発行年	1999
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000445/

インクルージョン・インタナショナル世界会議参加記

加 藤 春 樹*

緒 言

障害当事者の主体的表現と自己決定の保障は、今日的人権保障の数多い解決課題の中でも重要な論点である。それは、民主主義社会に適合するためにわが国の家族法枠組みに要求されている喫緊の改善課題——一つは民法における親権・財産権・個人の行為能力等に関与する成年後見制度（法）の創設（法務省民事局参事官室：1998）、今一つは明2000年に改定時期を控える精神保健福祉法における精神障害当事者に対する家族の保護（義務）規定の撤廃——と深く関わっている（白石：1998）。

前者については昨1998年、本学部に対する法務省民事局参事官の照会に応え、本学教員田中耕一郎・片居木英人両氏と共に起草した『意見』（cf.：資料）策定の過程でささやかな作業を行った。後者については筆者の所属する日本精神神経学会リハビリテーション問題委員会で、法改定動向に即応しつつ、リハビリテーション領域での検討を続けたいと考えている。

問題の焦点は、当然のことながら権利の実質的保障を具現する個別的な法枠組みであり、究極的には法文策定技術に至る。周知のようにわが国の法体系就中行政執行法令は個別法優先原則が貫徹しており、包括的障害者権利法の成立を期待しつつも、権利の個々の部分を担保する個別法の吟味と改善がそれに伴わなければ権利実質は現実化されない（兼子：1997，下山：1983）。このことは法文化された権利実現のファクターが、当事者の生活現実と直結することを要求するはずである。しかしそこに大きな溝が開いていることは、法曹・行政関係者、当事者支援に関与する人々、そして何よりも当事者や家族が日々痛感しているところであろう（林・古賀：1968・1980）。

法枠組みや法文のコンテキストと当事者のディスクールとの懸隔は余りに広い、というよりむしろ当事者のディスクールが予め聴かれる事は無い。当事者の権利に関する多くの研究成果がありながら、「当事者のことは当事者に」問うというルールは、わが国では未確立であり、国際社会に比べて10年以上のタイムラグを抱える（松本・西谷：1997，Koch et al.：1996）。

さらにそれは法のみの問題ではない。法に法律用語があるように支援においても支援専門領域の術後とそれに依拠するコンテキストがある。さらに個の独立と尊厳を普遍的概念とする西

*北海道女子大学人間福祉学部生活福祉学科

キーワード：インクルージョン，セルフ・アドヴォカシー，人権，選択権，自己決定

欧社会とは異なる文化特性を背景にしたディスクールがある。当事者のディスクールが法文の権利擁護条項に行きつくには、二重三重の異なる言語体系を超えねばならない。

西欧社会で生み出された実践概念としてのノーマリゼーションは、このことを——当然のことながら——当事者側ではなく法の側に要求した。そこでは当事者の現実の自己主張が、わが国よりはるかに直接、施策と法を形成し、改変しようとしている。当事者が表現すること、主張することが明確に先行し、尊重されている。本報では、筆者が参加した知的障害当事者の世界会議から、その実像を紹介したい。

1. Inclusion Internationalとは何か

この会議の正式名称は「XII World Congress Inclusion International：包みこむ（ための）インタナショナル第12回世界会議」——「包みこむ」を「包括」と訳してしまうとわが国では一層他律的で役所言葉の臭いもするcomprehensionが原語ととられかねない。「連帯」と訳しても良いが原義と些か離れる——といい、4年に1回時と所を変えて開催されている。今回は1998年8月21、22日に当事者会議を北海沿岸の保養地ノルドヴァイク（Noordwijk）で、本会議は続く23～28日の6日間、国際司法裁判所やハーグ陸戦規定などで著名なハーグ（Den-Hague）で行われた。

Inclusion International（以下I.I.）は、各国に組織された知的障害当事者・家族団体の国際組織ILSMH（International League of Societies for Persons with Mental Handicap）が改称したものであり、WFD（World Federation of the Deaf：世界聾者連盟）と共にパリに本部を置く。わが国の加盟団体「全日本手をつなぐ育成会」はI.I.を「国際育成会連盟」と呼称している。この種の障害当事者・家族の国際組織には他にDPI（Disabled People's International：障害者インタナショナル、本部カナダ・マニトバ）、WFPS（World Federation of Psychiatric Users：世界精神疾患ユーザー連盟、本部ニュージーランド・オークランド）、WBU（World Blind Union：世界盲人連合、本部スペイン・マドリッド）等があるが、I.I.は中でも最大級の組織であり、且つ他の当事者組織とは幾分異なる組織的性格を標榜している。それはI.I.が、当事者の利益擁護団体としてよりも、むしろ国際的人権擁護団体として自らを性格規定していることである。

今から5年前全米の知的障害者家族会は、突然I.I.を脱退した。I.I.がUNESCO（国連教育科学文化機構）と障害児教育における途上国援助などの諸課題で密接な関係を維持していることを非難し、その関係を絶つことを求めて容れられなかったことが理由であった。結果として全米の家族会は内部分裂をきたし、今その運動は非常な困難に逢着している。これは大国の政治権力にNGOが追随した帰結を提示する不幸な事例である。

この種のことは障害者団体に限らないのだが、「大国アメリカ」（NGOにせよGOにせよ）が脱退することは、国際組織においては——UNESCOに見られたように——組織・財政双方の困難を招来する。にもかかわらずI.I.が毅然として自己の方針を貫いたことには理由がある。

それはI.I.の出自が欧州圏にあり、ナチによるホロコーストとその犠牲（ユダヤ人、ロマ・ニャなどの少数民族、政治犯そして障害者）に対する痛切な記憶を自己のレゾン・デートルと重ねていることにある。このことが、I.I.の人権擁護団体という自己規定や大国の恫喝に屈しないバックボーンを形成していると考えられる。

2. 当事者会議「Onderling Sterk (Strong Together : 共に強く)」

この会議は当事者の主張を単に交流するためのものではない。六つの主要テーマがあり、各々のテーマは全参加者(300名)合同の討議に付され、それはステートメントとして本会議の各テーマ別セッション冒頭で報告された。即ち本会議の主要議題を構成するテーマは全てここで一度議論され、本会議が当事者の意向を受け更にそれを吟味しつつ生産的で実り多い討論を行い、最終的に理念あるいは行動規範として有用な結論を導き出すという形である。従って事前の当事者会議は、本会議にとって不可欠の前提であった。

会議はテーマ毎に順次進められた。先ず議長団ないし共同提案者からテーマの意義とその問題を取り巻く情勢が30分間報告され、続く50分間が討議に費やされた。テーマの報告と討議には、2日間は必ずしも十分とは言えなかったが、参加者の発言は最大限尊重され、そのためセッションの時間はしばしば延長された。

以下はそのテーマと討議の極めて大まかな要約である。しかし、どれも今日的に見て新鮮な問題提起であることをご理解いただけたらと思う。

1) 権利を現実のものに：セルフ・アドヴォカシーは転換をどのようにしてもたらし得るか。

このセッションは、「セルフ・アドヴォカシーのための国際委員会」がファシリテータをつとめ、日常的な当事者支持組織の活動、地域生活と市民的権利、障害者に対する公共の態度、障害者の生活と社会的役割を他の人々に教える際の当事者の役割などを現状のあり方から改変するうえで、どのような主張と運動が求められているか討論するものだった。

人権擁護のために国内法を整備する必要性が、先行して整備した国からも開発途上国からも提起された。また多くの発言者が、国連の障害者の権利宣言をはじめとする歴史的な人権擁護諸文書を運動の個々の局面で活用すべきであると強調した。

2) To Be or Not To Be : 遺伝情報のジレンマをどう取り扱うか。

このセッションでは、先進各国の試験研究機関で進められている「ヒト・ゲノム研究」について焦点的に討論された。

当然のことながら自らの生まれいずる権利、障害者の人間としての価値に多くの発言者が言及した。また遺伝的障害発生についても研究の是非を含め沢山の意見が出されたが、その中で「われわれは研究の必要性を一概に否定してはいない。しかしわれわれのことを研究するのならば、われわれの意見を聞きつつ研究すべきだ」という意見に共感の拍手が集まった。

3) 真の労働－真の報酬

知的障害者が職業選択から排除され、望む職業に就けないことは国際的一般状況であり、各国に存在する庇護授産所 (sheltered work shop) における労働と報酬は、当事者にとっては「権利としての労働・権利としての報酬」というリアリティを持たないことが指摘された。

発言の多くは平等な報酬を求めつつも、先ず就労機会の保障を強く訴えるものであった。またあらゆる国で不払い労働が存在することも指摘され、雇用における差別を禁止する政治的転換の必要性が語られた。

4) Hearts and Minds

差別を無くし、人々の理解を得、公的な支えを勝ち取るために何が必要とされているのか、そのための当事者の主体的な活動は何か、を問題にしたこの討論の土台は、各国から報告された差別の鮮烈な実態であり、会場内が静まりかえるようなシーンもあった。しかしその雰囲気は、「われわれは、われわれの社会に対して、われわれの貢献を認知させねばならない」という発言によって建設的な方向に転換された。

学校や職場を訪問し、われわれに対する恐れを払拭するように人々を教育する方策が必要だ、障害者の可能性を多くの人に知らしめるために、マス・メディアを活用すべきだ。われわれはコミュニティで目に見えるよう存在すべきだ等、障害と障害者を多くの人々に理解させるための数多くの提案が表明された後、無理解な医師の態度について再び発言があった。それに対する「医師やソーシャル・ワーカーや研究者は、われわれのことがとても分かり辛いのだ。彼らに理解させるには、彼らが分かるような形で、分かり易く説明してやる必要があるのだ」という応答に場内から共感の声が上がった。

5) 選択すること

「選択することはセルフ・アドヴォカシーの基本的土台である」という報告から始まったこのセッションでは、友達を持つこと、結婚、職業選択等の選択権確立と共に、日常生活の多様な局面で自分の選択が尊重されるようにせねばならないという発言が多かった。

とりわけ支えや助けを必要とするときに、その内容やサービスの質を選択できるようにすること、失敗 (mistake) する権利の必要性などは、現実生活の中から導き出された権利主張として重要な提起であった。また選択権を持つものとしての自己責任についても活発に議論された。

6) 頭上の屋根

The Roof Over your Headというこのテーマは、当初筆者には何を意味するのか判然としなかった。しかし「コミュニティの一員として生活することに意味がある」、「家族は守ってもらえるが、拘束される場合もある」という報告要旨を聞いて、その意味が見えてきた。

ここでは一人で暮らすこと、あるいは自ら選んだ特定の仲間と暮らすことが尊重されるべきであるということ、そのための住宅やオプション（家具・什器・補助具等）の保障について提起された。また家族に対する感謝の言葉や「家族が自分の選択を尊重してくれた」ケースなどを交えながら、自分の希望が尊重されねばならないこと、自分の家の「主人」になることの重要性が、明確な根拠を伴って報告された（時間が不足し、この報告に関する討議は省略された）。

2日間にわたる討論は実に丁寧に行われ、会場からの質問や意見には、一つひとつ議長団や主報告者の応答——結論を押し付けることなく共に考えるという姿勢にあふれたそれ——が返された。声高な告発も怒声も無く、差別の痛苦と悲しみに満ちた体験も静かに語られ会場のエンパワメントに支えられた。高騰な現実離れした理念ではなく、個々の発言者の体験した事実に基づいて討論は進行した。

最後にはほぼ全ての発言の焦点がOHPフィルムで映写され、それぞれのテーマについて、「われわれの展望—われわれが欲すること」、「行動—何を起こし何を変えるか」、「障壁—われわれが当面する困難」という三項目に、会場を埋める参加者の確認を求めつつ整理された。

筆者はこの国際会議の運営のあり方と、討論内容を集約する手法に感動した。六つのテーマの各々が複雑な内容を持っている。応えは決して一様ではない。しかもそれが僅か2日間の会期で議論されるという大変な効率性と合理性が貫かれたのに、個々の発言が大切にされ、ほぼ参会者の意思を反映したステイトメントに纏め上げられる。これには高度な民主主義感覚のみならず民主主義的会議運営に熟達していることが求められる。そこには議長団を構成する当事者等の周到な事前準備がある。それが「Onderling Sterk = 共に強く」を能く実現し得たのだと思う。

3. 本会議「Partners in Action（協同者たち：行動のパートナー）」

本会議はハーグの国立会議場に会場を移し、1,000人を超える参加者を得て開会した。I.I. 会長Wim van Empel氏の開会挨拶に続くネーデルランド副首相（健康福祉スポーツ大臣を兼務）Els Borst-Eilers女史の歓迎挨拶に筆者は仰天した。

「あなた方の根拠のある戦いが、われわれ政治と行政を司る者を励ます。あなた方の戦闘隊形が（彼女はstruggle formationと言った）確かであればあるほど、われわれは財政措置を講ずることが可能になる。あなた方のセルフ・アドヴォケイトが進歩を可能にするのだ」。

開会式のアトラクション、それらを企画した当事者の活躍、市長主催のレセプションなどエピソードに事欠かないが、会議の論点ではないので本稿では触れない。ただ、国際会議場に程近い（と言っても1.5キロは優にある）王宮から、女王が執事とSP僅か三人を伴に歩いてきて、一般参加者と同じ席で開会式に参加していたことだけは、書きとめて置く。

本会議では、当事者会議のテーマに概ね基き、それを具体的行動課題や行動の主体別に細分化したテーマ別セッションが、5日間連続して持たれた。その全てを紹介することは、筆者の

出席したセッションが限られており困難である。しかし会議の雰囲気はどのようなものであったか幾分でもご理解いただけるように、筆者が参加した一つのセッションを幾分詳しく紹介することにする。

〈当事者の意見表明は転換をどのようにもたらし得るか〉

8月24日午後 於：ヴァン・ゴッホ・ルーム

このセッションは、I.I.当事者会議の議長ロバート・マーティンの司会で進められた。参加者は徐々に増え、100人近い数で、多くの発言があり、しかもそれが穏やかで深い信頼に支えられ感動的であった。

冒頭、事前2日間にわたって行われた当事者会議、「Onderling Sterk（共に強く）」議長アレクス・ライホルトから、その内容のうち行動計画に関わる部分について、「我々は権利擁護のために『人権宣言』をもっと活用すべきだ。障害者の置かれた状況と法の改善のために、行政機関と交渉すべきだ。我々が成功した話や人間の可能性を示した実績を伝えるために、公教育メディアをもっと活用しよう。人間、即ち我々の価値を示す用語や言葉（言語）を使おう。我々の活動にもっと困難な障害を持つ人々を巻き込もう」等の提言があり、質疑応答に移った。

質疑では、「当事者会の国際事務局はそれ自体我々の協同組織ではないか。個々の国の状況を転換させるために、事務局としては何をしてくれるのか?」、「国際的な支援をする上で、私たちの（国の）現実には是非目を向けて欲しい」という国々・地域の個別的な要請が相継ぎ、「私自身はトラブルメーカーであることから始めた。システム中心の現実に対して、私の求めたことは（現存の）システムに合わなかった。だから自ら当事者の協力組織を作ることから始めた」という意見も出た。

これらを受けてロバートは、「国際組織に、多くの人々は自らの必要と高い期待とをかけてくる」と前置きし、「アレクスが報告した『共に強く』（当事者会議）は、障害者が今抱えている多くの困難な課題を浮き彫りにした。我々はそこで若い仲間を見出したし、我々の心を受け止める（他分野の）友人たちを見出した。我々の家族は一般には我々の最も力強い支え手だが、そうでないこともある。差異とそれに対する差別の中で、我々はやはり自己主張し自己決定しなければならないし、それが通常の生活や働くこと全体の中で支えられるようにしなければならない。

誰もが職業場面でのいろいろな関わり・支えと、楽しい友人との交わり・支えを求めている。科学は我々のそういうものをとりわけ無視しているように見える。最も重視されるべきものは生活なのに、科学者はそれを知らないでいる。そして何が研究されているかを我々に告げようとしな。そこで会議はすべて国の人々の生きる権利の『宣言』がなされるべきだと考えて、それを作成した。このことを基本にして『権利のための教育』つまり、経済生活など他分野（à la carte）のトレーニングが求められているし、行われるべきだ。

社会的公正に向かって進もう。我々は人々が耳を傾けてくれることを信じて、伝えていくべ

きなのだ」と応えた。

司会者は、さらに質問と合わせて各国の意見を出すよう求めた。

「自分が（現に）生きて住んでいる町で『これは私の権利だ』というのはとても難しい」、「友人や支援者になってくれる人は良い。むしろ障害者を決して理解しようとしない人がいるのだ。

『障害者はミスばかりしてる人間だ』という発想を打ち破ることが必要だと思う」、「人々は理解し合わねばならない。全ての国々の人々が理解し合うために奮闘しよう」、「我々は人間である、という原点に常に立ち戻って語り、語り合う仲間を増やすことだ。私はそうしてきた」、「この会議に出ることができて感激、成功して嬉しい」などの意見が続いた後、デンマークの参加者ギッタ・クリスチャンセンが以下のように語った。

「私たちが自分たちの要求を社会に向けて訴え始めたのは、ごく最近のことだ。以来それを国家機構や政府機関に理解させていく上で、とても困難に立たされてきた。

自己決定し、自己決定したことを表現するためにもスキルズ・トレーニングや他の多くの支援を必要としている私たちが、政治的民主主義の政策過程に参加することはさらに困難だった。しかし私たちの活動の発展や私たち自身の成長によって、一つひとつそれを越えてきた。今言えることとして最も重要なのは『機会の提供』だ。もしあなたが責任を与えられることを望むなら、それを動かす方法を知らねばならない。あなたは手段を手にならねばならない。あなたは上手に語ることを学ばねばならない。なぜなら転換を欲するとき、あなたが語らねばならない相手は政治家だからだ」。

また、パナマからの参加者ハイデ・ベックルは「パナマの女性たちは大家族制の中であえいでいる」と話し始めた。「銀行に行くにも、役所に行くにも、マーケットで買い物をするにも、常にどこでもママの手を借りねばならないという生活の現実の中で、いったいどこに自己決定があるだろうか？ それから脱却するための支えこそママに求めたい。これこそは社会システムの問題なのだ」。ここまで発言したとき聴衆から「あなたはとても自立した女性に見える。それなのになぜ母親と暮らすのか？」と質問があり、「端的に、私には収入がない」と彼女は話しを続けた。「パナマの女性障害者グループはまさにこうした現実、つまり貧困とも闘わねばならない。大家族であることが生存を辛うじて守っているのだ。私は多種多様な人々に了解を求めねばならない。私は自分でできる事を母に教えねばならないし、もちろん自分の銀行預金を操作できることを示さねばならない。私は母が私にそういう機会を与えてくれていることを、とても幸せだと思っている」。

最後に司会者のロバートが、「どのようなニーズに対して、どのようなサポートを求めるか自ら具体化することが自己決定のポイント。自己決定が施設機能拡充に解消されないよう施設をスケールダウンさせていくことも課題だ」と語り、貴重な意見を明日につないでいこうと述べ、共感あふれる拍手で会議は散会した。

結語—セルフ・アドヴォカシーとエンパワリング・ソーシャル・ワーク

すでに見てきたように当事者会議は全般的に知的障害当事者の手で運営され、300人の参加者の熱意溢れる質問や意見が続いた。意見や質問は先ず自分自身が体験した差別や、自国での当事者運動設立や運営の苦労などに触れつつ、テーマに対する意見を述べたり、運動をリードしている人々の助言を求めるという形で、生活現実が伺えるような具体的なものだった。そして回答する人々も質問者の言葉を大切に、自分の体験を織り込みながら諄々と考えつつ応えるという丁寧で濃密な時間が流れた。セルフ・アドヴォカシーは声高に叫ばれるのではなく、生活に裏打ちされた生身の言葉でその場に積み上げられ、記述された。そこには確かに「生きているエンパワメント」が機能していたと思う。

当事者運動は、当事者の主体性と主導性によって自立的に発展する。そこには数多くのサポーターがおり、発言の記録の多くはサポーターによって行われた。また当事者運動が当事者相互の協力と当事者集団の自立的な営みによって担われる背景には、サポーターの粘り強い努力があり、サポーターの中に数多くのソーシャル・ワーカーがいることは周知の事実であった。

わが国でままある傾向として、当事者運動に身を寄せ同衾することを、あたかも自身のソーシャル・ワーカー・アイデンティティと錯覚する向きがあることは、夙に指摘されるところである。I.I.におけるサポーターの役割は実に明快で、① 会議運営が民主主義的に行われるための支援、② 集団の中で発言するストレスを軽減するサポート、③ 記述困難な当事者に代わって記述し、それを読み上げて当事者の確認を得るなどのてだてにのみ関与する、という限定性に彩られていた。会議の内容と現実の運営には一切手出ししないというスタンスが厳しく守られ、と同時にグループ（ピア）・ワーク経営、リコーディング、ストレス・マネジメントなど、「当事者が自分でアドヴォカシーするために」「それを可能にし、支える」プロフェッションの発揮、つまりエンパワリング・プロフェッションが明確に要求され期待されていた。

サポーターは当事者からはコーチと呼ばれ、会議に出席している家族とは区別され、現職のソーシャル・ワーカーやカウンセラー、ソーシャル・ワークや心理領域の大学院生などであった。

この会議では専門職に対するシビアな批判があった。しかしそれと共に、専門職の専門職たる所以の発揮を期待する真摯なメッセージもあった。自己を当事者に同化し運動に同衾することが期待されているのではない。先達の長い営みによって開発されてきた方法と技術を駆使し得るという意味で自立したソーシャル・ワーカー、機能的サービスを提供し得るプロヴァイダーとして、当事者運動の主人公と相互に尊敬を感じつつしっかりと向き合うことが、わが国の同僚に要求されている。それ無しに「真の表現・真の決定」は実現できないのである。これは筆者の自戒でもある。

Reference

- ・ 林迪廣・古賀昭典（1968）：現代社会保障法論，法律文化社
- ・ 林迪廣・古賀昭典（1980）：社会保障法講義，法律文化社
- ・ 法務省民事局参事官室（1998）：成年後見制度の改正に関する要綱試案，1-12.
- ・ 兼子仁（1997）：行政法学，岩波書店
- ・ Koch H-G., Reiter-Theil S., Helmchen H. eds, (1996) : Informed Consent in Psychiatry, European Perspectives of Ethics, Law and Clinical Practice, Nomos Verlagsgesellschaft, Baden-Baden.
- ・ 松本博之・西谷敏編（1997）：現代社会と自己決定権——日独シンポジウム——，信山社
- ・ 下山映二（1983）：現代行政法学の基礎，日本評論社
- ・ 白石弘巳（1998）：成年後見制度と保護者制度，病院・地域精神医学，40（4），325-330.

付記：本会議で注目されたDAA（Disability Awareness in Action）の活動には紙数の関係で触れられなかった。いずれ校を改めて紹介したい。また本国際会議出席は北海道女子大学特別研究費の交付に依った。記して感謝する。

<資料>

1998年7月17日

法務省民事局参事官室 御中

北海道女子大学人間福祉学部

「成年後見制度の改正に関する要綱試案」に対する意見具申について

謹啓，貴台におかれましては時下ますますご清祥のことと大慶に存じ上げます。さて本年4月21日付貴台お申し越しの，表記試案について本学部におきましては，下記の教員に委嘱し検討した結果，別紙のとおり意見をまとめましたので具申いたします。宜しくご査収，ご検討の程お願い申し上げます。

敬白

記

人間福祉学部教員：片居木英人，加藤春樹，田中耕一郎

<別紙>

「成年後見制度の改正に関する要綱試案」に対する意見

北海道女子大学人間福祉学部

意見

1. 「補助」，「保佐」，「後見」の3類型については，一元化することが望ましい。このことから「補助」ならびに「保佐」類型については省略し，以下後見類型についてのみ述べる。
2. 福祉行政機関を限定し，申し立て権を付与するものとする。
3. 裁判所の職権による申し立て権を認める。
4. 検察官の申し立て権は廃止する。
5. 後見対象の後見必要度については，医学的・心理社会的鑑定を要する。鑑定人の選任ならびに鑑定基準の策定・運用については，オンブズマン制度に類する何らかの市民（第三者）機関による監視・監督の制度的整

備を要する。

6. 後見内容は原則として財産管理のみとし、医療を含む身上監護については必要度について厳格な基準を設け、その判定は裁判所が行うものとする。

7. 後見開始請求ならびに後見内容判定にかかる本人審問については原則的に行うものとし、後見要件として位置付ける。

8. 本人審問については、本人の意志決定を担保する何らかの司法福祉の支援（介入）の制度的整備を要する。

9. 後見費用については実費請求権を認める。被後見人が支払能力を欠く場合は国庫負担とする。

10. 監督業務を裁判所に一元化する。後見監督人は廃止する。

11. 任意後見を法制化し、その後見枠組みは上記に順ずる。

理由

後見制度は、英米親権法・ドイツ世話法等の動向に鑑み、全体として福祉法（権利擁護法）枠組みで制度化されることが本来である。その際当事者の自己決定を阻害し、あるいは当事者の不利益を結果する等の可能性を当然のことながら極力排除するものでなければならない。

鑑定は現下の社会状況下では、当事者に対する不当な後見強制、あるいは不利益を防止するための必要悪であると考えられる。

身上監護については、精神保健福祉法における保護者規定廃止が社会権の指向性に鑑み当然であると判断し、その動向とリンクすることが必要であると思量する。

以上

The Twelfth World Congress of the Inclusion International --A Report--

Haruki KATO

ABSTRACT

This is a brief report on "Self-advocating", an important theme of the "Twelfth World Congress of Inclusion International", held in Netherlands in the summer of 1998.

This report mentions briefly the activities of the "Inclusion International" emphasizing its differences from other international organizations. Also mentions here, is one of the sessions in the congress, "Onderling Sterk (Strong Together)", which outlined how consumers could organize themselves.

Three hundred participants discussed the following themes during the two-day sessions.

1) Turning Right into Reality: How self-advocates can bring about change, 2) To Be or Not To Be: How to deal with the dilemmas of genetic information, 3) Real Work - Real Pay, 4) Hearts and Minds, 5) Making Choices, 6) The Roof Over Your Head.

Through discussion, the participants recognized the each theme should be examined from the points of "Our vision - What we want", "Actions - What has to happen/change", and "Barriers - the difficulties we face".

The congress concluded that self-advocacy should be composed of self-expression, and self decision, supported by the professional skills.

Key words : Inclusion, Self-Advocacy, Human Rights, Rights of Choices, Self-Decision